
シーナと八百万の神々

乙未七菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シーナと八百万の神々

【Nコード】

N1873C

【作者名】

乙未七菜

【あらすじ】

ボクらが棲むこの小さな島国には八百万の神々がいるらしい。ボクはその神様にあってみたいと思うけど、椎名くんはいつだってつまらなさそうに頷くだけなんだ。思えば、だれだってなんだって神様になれるのに。

シーナと八百万の神々 00 (前書き)

比較的いろいろなものがえげつなかったり意味不明だったりします。

シーナと八百万の神々 〇〇

「そんなところでなにしている」

それが僕とシーナとの出会いだった。

最初の授業の後、同じクラスの連中は新入生歓迎会とかいう面倒くさいイベントへと連れて行かれていくはずだった。

先輩達に無理矢理肩を組まれてどこかへと半ば連行されていくような形で消えていくクラスメイト達。屋上で僕はその景色を煙草をふかしながら眺めていた。

「あんたこそ、そんなとこでなにしてんだよ」

シーナは僕の言葉にこれっぽっちも動じる様子もなく、まるでずっとそうしていたかの様に自然な動きで僕の隣へとやってきた。

向かいのカラオケのネオンサインが目につるさい。

「ああゆう面倒なの、嫌いなんだよね」

「俺もだ」

シーナはふふふと鼻だけで笑うと、ポケットから煙草を取り出した。それからがさごそとありとあらゆるポケットを探る。僕はライターを差し出した。

「どうも」

「いえいえ」

勢いよく吐き出された煙は、生ぬるい都会の風に飛ばされて夜の闇に溶けて消えた。僕は指先までやって来ていた火に驚いて、慌てて足元へと落として踏み消した。

「まぬけ」

また、ふふふと笑うとぼんぼんと手の中の携帯灰皿へと灰を落とした。

ほぼ初対面の人間にそんなこと言うなんて失礼にも程があると思う。

僕は半ばキレ気味で、肩にかけていたカバンを持ち直してその場

を離れようとした。

「まってよ」

シーナは僕の腕をがしつと掴むと、自分が吸っていた煙草を僕に持たせた。自分は自分でまた新しい煙草を取り出す。それから「火がない」と言つて、遠まわしにライターを貸せとせがんだ。

僕は仕方なしに煙草を銜え、ライターを差し出した。

「確か同じクラスだったよね、キミ。名前なんていうの」

シーナは屋上の手すりに持たれかかるようにして、下の景色を見ながら言う。

「椎名」

しいな。そう反芻して、にやりと笑った。

「いいね。その名前、ボクに頂戴よ」

「はあ？」

そう言つた拍子に煙草の灰が僕の指からはらりと落ちた。

僕が慌てて服を掃っていると、シーナがまたまぬけと言つて笑つた。

「ボクはデザイン学科のシーナ。よろしくね」

笑うシーナと、なにも返せず口をぽかんと開けたままの僕。その間には生ぬるい都会の風とうるさいネオンサインの光。差し出された白い手が暗闇に浮かんだ。

それが僕とシーナの出会いだった。

シーナと八百万の神々 00（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

さあ、意味不明小説の幕開けです。

このところ投稿してないのもあり、カテゴリとかが適当です。果たしてこんなでいいのか？

内容云々に関しても気になりますが、カテゴリあってるのかが一番気になるところですので、そこらへんアドバイスいただけると嬉しいです。

相変わらずの亀更新になりますすががんばりますので、続きも気にしていただけたらこれ幸いです。

あいをこめて。

i
z

シーナと八百万の神々 01（前書き）

比較的いろいろなものがえげつなかったり意味不明だったりします。

シーナと八百万の神々 01

僕はどちらかというと言えない方で、顔もそこそこ普通だし、頭だつてそこそこ普通だ。正確もこれといって悪くもなければよくもない。特技なんていものはこれといってなくて、たぶん敢えて言うなら何時間でも寝れるとかそういう類で。

育った家庭環境もこれといって普通だ。中流家庭に生まれて、なんだかよくわかんないうちに18年も生きてしまった。でかくもなければ小さくもない地方都市から、まあそれなりに都会の専門学校に出てくるというシナリオはよくあるもので、僕もそのうちの一人つていうやつだ。

小さい頃から両親とも共働きであまり家にいなかったからか、一人暮らしというやつに慣れるのは簡単だった。さほど変わらない。変わったのは部屋の広さとか、水のまずさとかそれくらいで、電気の点いていない家に帰るのになんの恐怖も寂しさも感じなかった。

しかし、そんな僕にも恐れるものがある——シーナだ。

シーナからは毎晩電話がかかってくる。早ければ日没直後、遅ければ夜明けギリギリ。電話に出ないからといってどうにかなる訳ではないが、なんとなく恐い。あのにやりとした笑顔が恐いのだ。

シーナと出会ったあの夜、うっかり携帯の番号を交換したのが間違いだつた。今更後悔などしても遅いが。

しかし、不思議なことにシーナからの電話は、いつも夜にしかかかってこなかった。日があるうちにかかってきたことは一度もない。不思議だ。

深夜2時。

僕がひとり自室でかたかたと課題をこなしていると、電話が鳴っ

た。案の定シーナからだ。

「今忙しいんだけど」

僕が開口一番そう言っていると、シーナはふふふと笑ってそれから意味不明な言葉を吐いた。

「ねえ、椎名くん。アジアの大陸の東、更に船で進んだ先にある、小さな島国にはさ、八百万の神々がいるっていう噂なんだけどなんか知らない？」

ほらまたシーナが意味のわからないことを言うから、せっかく切っていたパスが思いもよらぬ所で閉じちゃったじゃないか。

僕は小さく舌打ちをして、それから目の前のPhotoshopのウィンドウを閉じた。Macのメモリーがじりじりと鳴いた。

「なにそれ」

銜えた煙草に火をつけて息を一つ吐き出すと、電話の向こうのシーナに親切にこう言ってる。

「お前、そんなこと言ってる暇あったら課題やったら？期限明日だろ？」

シーナはそれならもう出したよそれと笑う。

「期限はもう今日になっちゃったけどね」

まぬけ。またそうやって笑う。

「俺はまだ終ってないの。用がないなら切るよ？」

「つまんないの」

ぶつり。先に切られた。

やっぱりシーナからの電話は、出ても出なくても恐い。

シーナと八百万の神々 01（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

さあ、やっぱり意味不明小説です。

相変わらずカテゴリ合ってるのかなーこれ。

結局のところ00と02、あとはまだ見ぬエンドを書きたいが為に書いているのもうどうしようもありません（↑作者がね）

感想とかいただけたらうれしいなあって。

相変わらずの亀更新になります、続きも気にしていただけたらこれ幸いです。

あいをこめて。

i
z

シーナと八百万の神々 02 (前書き)

比較的いろいろなものがえげつなかったり意味不明だったりします。

シーナと八百万の神々 02

授業というのはなんでまたこういつになっても、いくつになっても退屈なのだろうと思う。それはたぶん、僕がいけないんだろけど、それにしても退屈なのは事実だ。

僕はもうそれはそれは適当に真面目そうなフリを装う。たぶんそれはシーナにはバレているんだろけど、他の誰かさんたちはバツチリと騙されてくれている。

たぶんそれは僕とシーナが、かなしいかな同じ人種だからだと思う。

まあ、そんなこと口にしたら半殺しどころじゃ済まなさそうなのではないが。

シーナの恐ろしさというのは、どちらかというと恐怖よりも畏怖に近い。

わからないから怖い。

例え笑っていたとしても、その薄い皮一枚下で何を思い、何を考えているかがさっぱりわからないのだ。

だからそれがわかる人間——例えば僕なんかにはその恐さ、怖ろしさがよくわかる。もし神がいるのだとしたらああいう人間なのだろうと思う。

夜だというのに鐘は軽快になり、その軽快さを全く感じさせないほどぐつたりと僕は授業を終えた。

少人数制をウリにしているうちの学校は一クラスの人数が半端なく少ない。現にうちのクラスも全部で6人しかいない。その内の一人が僕であり、そしてシーナなのだ。

「あゆたんさあ、この後飲み行かない？」

「えー？」

「あゆたんいるとさあ、こう、ぱつと明るくなるのよ」

「そうそう、華があるっていうかさ」

「なんでー？」

さっきまでの重たい空気を引き摺る人気の少ない教室内で、男子諸君があゆたんこと立川歩を飲みこみに誘っていた。このクラス唯一の女子で、見た目もまあまあだ。

「男だけだとつまないんだよ」

「いーじゃん、男だけでいけばー」

立川がきやははと楽しげに笑い、男子諸君はあははと悲しげに笑った。

「椎名」

「あん？」

隣の席の変態メガネが、僕の肩に手をかけ名前を呼んだ。

「お前には無理だ」

「は？」

「お前さっきからずっとあゆたんのこと見てるだろ」

「なにが言いたいんだよ」

そしてそのメガネをくいと上げて言う。

「お前とあゆたんはつりあわない。諦めろ。あゆたんはみんなのあゆたんなんだ。お前だけのあゆたんにはならん」

……何を言い出すと思えばこのド変態が。なにがみんなのあゆたんだ。ただでさえお前は変態なのに、偶像崇拜と過度の妄想によって更にその変態度を上げてどうするんだ。というか、マジでヤバいからやめとけ。そこまでにしとけ。もうすでに十二分に変態なんだから。

「……あのさあ」

僕はため息を一つ吐くと、とりあえず荷物を持って立ち上がった。

「俺たち、もう付き合ってるんだけど」

変態メガネのその冷たいレンズの向こうの目が凍りついたのは言

うまでもない。

学校を一步出ればそこは雨の夜の街で、当然ながら傘など持っていない僕はコンビ二に立ち寄ってビニール傘とコンドームを買った。

店を出るなり立川は僕の傘を奪って一人走っていつてしまうものだから、僕は当然の如くびしょ濡れになった。なんの為に傘を買ったのか意味がわからないと思いつながら追いかけていくと、立川は急に立ち止まって僕の頭を引き寄せて強引にキスをした。

雨に濡れた傘とコンビ二のビニール袋についた水滴がその後のいろいろを象徴しているようだと思った。

雨に濡れた僕の髪の毛と湿った立川の肌とがシャツやらタオルケットやらを更に邪魔にさせる。

なにをどうしたって冷え切った体もどうにもならない精神も変わることはないのに、僕たちはその先を求めて時々抱き合う。

もうどうしようもないなって思いつながら眠る時、やっと僕が正常に透明な生き物になったように思える。

どうしようもなく透明な僕は、どこまでも堕ちていく夜みたい、に黒いシャツとか、これといっておしゃれでもなければかわいくもないただたださいだけのタオルケットに包まれている。

いつだって最後は汚れたシャツを立川がまるでゴミ箱に棄てるみたいに洗濯機に放り込むんだけど、今日は雨だからと言って本当にゴミ箱に棄ててしまつて、結局まっさらな布団だけになったベッドの上でまた抱き合った。

本当にどうしようもないな。

そんなことを知ってか知らずかシーナからの電話はない。きつとどこかでこんなどうしようもない僕を嘲っているに違いない。

シーナと八百万の神々 02（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

どうも、意味不明小説です。

どうしても書きたかった02。しかもどうしても書きたかったのはたった一文だけな02。かといって話の本筋とは全く関係がなさげな02。

それでもまだ、もうちょい、だいぶ続きます。

きっと素敵な事も沢山あるでしょう。

感想とかいただけたらうれしいなあなんて。

相変わらずの亀更新になりますが、続きも気にしていただけたらこれ幸いです。

あいをこめて。

i
z

シーナと八百万の神々 03 (前書き)

比較的いろいろなものがえげつなかったり意味不明だったりします。

シーナと八百万の神々 03

久々に僕の家に訪れたシーナは僕の作りかけのポートフォリオをばらばらと眺めながら煙草に火をつけた。

一方の僕はというと相変わらず課題は終らないし、なのに課題が終っているシーナの夕飯を作っているしで、もはや僕は一体なんなんですかといった心地だ。

とりあえずなんか食わせておけさえすれば何にもならないので、僕はフレンチトーストを作ってやっている。ちなみに僕はというと、これと言って食欲もないので食べていない。

「椎名くんさあ」

「んー？」

「才能あるんだから、ボクと組まない？」

ああ、もうこの人意味わかりません。いや、最初からわかった試しなんてないんだけどさ。うん。

適当な皿に焼きたてはやはや湯気上がりまくりのフレンチトーストを載せてシーナに出してやると、代わりだと言わんばかりに完成されたポートフォリオを差し出してきた。

シーナのポートフォリオは、すごい。たぶんではなく確実に僕なんかより遥かに才能があるし、かといってそれだけに頼っていない。

すみずみまで細かい配慮がなされていて、見るものを飽きさせない。淡々としているかと思えばはっとするような色使いのものもある。またその緩急の付け方というものが言葉に出来ないほど上手い。これほどに卓越した技術があるというのに、何故こんな学校に通っているのが不思議だ。

「あのね、あなたさあ」

「ボクはね、椎名くんが作るものが好きだよ」

シーナはフレンチトーストにシナモンシュガーをこれでもかとい

うくらい振りかけている。

僕はというと、もうどうにもならないこの現状に疲れてきて、半ばやけになりながらシーナが持ってきたワインを飲んでいた。赤いその液体は僕の口の上で綺麗に香ると、滑るように咽喉を通って胃に落ちていった。今日に入ってからこれといってなにも食べていない僕の胃袋はそれらを察知して、そして液体はその表面を撫でるように痛み出した。

「椎名くんのデザインはさ、まるで椎名くんそのものを体現しているみたいなんだよね」

なんていうのかな、椎名くんが作ったものは、椎名くんではないはずなのに、まるで椎名くんそのものがそこにあるみたいなんだ。ボクとかは作品とボクの間にボーダーラインを引くんだ。これはボクじゃないって、ね。でも椎名くんのはそうじゃない。まるでそこに椎名くんがあるみたいに、全部が全部椎名くんなんだ。なんのボーダーラインもなく。椎名くんदैいっぱいなんだよ。

シーナはシナモンシュガーまみれのフレンチトーストをナイフとフォークを使って器用に食べると、パンパンと手をはらうみたいに叩いた。それから煙草に火をつけて口に銜えた。ふうと吐かれたその息は甘いような苦いようななんともいえないにおいがした。

「椎名くんはさ、神様って信じてる？」

そしてまた唐突に訳のわからないことを言う。僕はもうそんなのには慣れきってしまったって、半ば真面目に半ば適当に返答をする。

「別に。いたらいいなとは思っけど？」

頂戴、と手を出すとシーナは僕に半分になった煙草を渡した。それはやはり甘いような甘くないような、どうしたらいいかわからない味とにおいがした。

「ボクらが棲むこの小さな島国には八百万の神々がいるらしい」

「またそれか」

「キリストは葡萄酒を自分の血だと言い、パンを自分の肉だと言っ

て分け与えたわけだけど、つまりそれってどこにでも自分がいるってことが言いたいんでしょう？」

シーナは目の前の何もない皿を見て言い、僕は自分のワイングラスを見ながら聞いた。

シーナの真つ黒な目に白いプレートが浮かぶ。

「それはつまりどこにでも神はいるってことじゃないかって僕は解釈してるんだけど」

「で？」

僕はワインを一気に煽った。

「それがとても椎名くんに似ていたからさ」

ふふ、とシーナが笑い、はあ？と僕の声が裏返った。

「思えばそこにいるみたいに、椎名くんの作品には椎名くんがいまするってことさ」

指先の煙草がもうだいぶ短い。

シーナと八百万の神々 03（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

どうも、意味不明小説です。

なんていうか、もう本当に後先考えずに書いているのでなんにもならない話だなんてここらへんから思い始めました（遅）せめてプロットくらい組もうよ、自分orz

感想とかいただけたらうれしいなあなんて。

相変わらずの亀更新になります、続きも気にしていただけたらこれ幸いです。

あいをこめて。

i
z

シーナと八百万の神々 04 (前書き)

比較的いろいろなものがえげつなかったり意味不明だったりします。

シーナと八百万の神々 04

「いつもどこかに椎名のカケラを探してる」

立川はそう僕に言っていると、眠ろうとしている僕の体に触れた。冷たくもなく、ただただぬるい立川の手が僕に触れる度、どんどん透明になっていくイメージを抱く。

本当にどこまでも果てしなく透明になってしまつて、例えばこの皮膚さえも透けて、感情や思考が全て視覚化されればいいのに。僕らを隔てるものがまつさらなにもなくなつて、本当の意味でひとつになることさえ出来れば、僕らはこんな愚考に走ることはないだろう。

「目に映るもの全てが椎名が愛するものだったらいいのにね」
そうすればあたしは何ひとつ迷うことなく生きてゆける。

かなしげにそう呟いた立川の小さな背中中に手を回して、抱きしめたらかなしくもないのに何故か泣きなくなった。

全てを愛しているということ。それはきっと全てを愛していないのと同じ。

かなしくはない。ただたださみしいだけ。

「ねえ、椎名」

パスタを作る僕に立川は呼びかけた。煙草の灰がぼろりと落ちて、いけねと諸々をシンクに押し付けた。

「夢みたいなのはしようよ」

「はあ？」

世の中どいつもこいつもわけわかんないヤツばっかである。もう本当にどうにかして欲しい。

というか、普通の人間は僕の周りにはいないのか。

「夢みたいなのはなしー」

「あのさあ、」

「例えばさ」

例えばあたしと椎名が大人になってね、例えば変わってしまったとして、ああ、例えばの話だよ？例えば、バラバラになってしまったとしても、椎名はあたしのことを思い出すのかな？例えば椎名は、あたしのことを夢に見たりして、涙を流したりするのかな。例えば椎名に家族——奥さんと子供とかが出来たりして、幸せの真っ只中にいるときにでも、あたしがいたかけらっていうのは残るのかな。あたしがいたからどうか、いなかったからどうか、そういうことじゃなくてさ。ほら、なんていうか

「あたしはいつまで椎名の一部でいられるの」

僕は立川の言葉を遮るみたいにキスをして、それから壊れてしまわない程度に強く強く抱きしめた。

「椎名」

答えてよ椎名。

立川の笑うみたいに泣く声と、パスタの茹で上がりを告げるタイマーの音がしている、真夜中。

夜明け前が一番暗いというのは嘘だ。

夜とも朝ともつかない時間に、電話が鳴った。

「椎名くん」

「なんだよ。俺眠いんだけど」

「一緒に行つて欲しいところがあるんだけど」

いつもより、ひとつかふたつトーンを落とした声でシーナはそう言い、僕は灰皿の中から燃えさしの煙草をつまむと火をつけた。

「どこ」

「精神病院」

半分ぼうつとした思考で僕は問い、シーナはどこまでも透明な声で答えた。

「やなこった」

ほら、もう夜が明けるよ。シーナ。

シーナと八百万の神々 04（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

どうも、意味不明小説です。

04は一番力オスな感じになりました。椎名くんもシーナも立川も出てきてるからね。

てゆかこれだけいろいろ出てくると、作中で『しいな』という語句をタイピングする回数がやたら多くて困るんだ。そして今打っている『しいな』がどの『しいな』かわかんなくなるんだ。

…駄目じゃん（げんなり）

そんなこんなで、感想とかいただけたらうれしいなあなんて（無理矢理まとめた！！）

相変わらずの亀更新になりますが、続きも気にしていただけたらこれ幸いです！

あいをこめて。

i
z

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1873c/>

シーナと八百万の神々

2010年10月9日02時27分発行